北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

環境芸術としての彫刻に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-07-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 寺田, 栄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004528

北海道教育大学紀要（第１部Ｃ）第46巻　第２号　　平成８年２月
Journal of Hokkaido University of Education (Section IC) Vol. 46, No. 2　　February, 1996

環境芸術としての彫刻に関する一考察

寺　田　　栄

はじめに

子供の頃より何かを作ることに興味を持ち，また当時（昭和30年代）は今ほど物が豊富にある訳ではなく，自分達で身の回りにあるいろいろな素材を拾っては組み立てるということが日常であった．また周囲の大人達も子供のために何かを作ることを当り前のように行っていたように思う．私の記憶の中で思い出をたどれば，遊び場は近所の材木置場であり，その材木の積み重なっている僅かな隙間に隠れ家のような空間を見付け，子供同志でそこに色々なものを持ち込んで遊んでいた．また叔父がヨットを従兄弟や私のために薪にするような木をナタで削りガラスのかけらで磨いて船体を作り，母親がその帆を縫ってくれて一艘の船が出来上がった．子供達は自分達で工夫して遊びを覚え，大人達もそれに，今考えると自分達が作ることの楽しみをそこに込めながら，手を貸していたように思う．現在私が彫刻という仕事に携わっていることも，その頃の物作りに自然と導いてくれた当時の環境や周囲の大人たちの眼差しを感じるのである．

私が彫刻の中でもとりわけ石彫に興味を覚え，現在も続けているその原点を思い出してみると，子供時代のもの作りから中学生の頃の木彫につながっている．当時から美術には興味を待っていたが絵を描くということより何かを作ることのほうが好きで，その根底にあるのは道具を使うことの楽しみがあったと思うのだが，ノミを使って木を彫り形が表れてくる．そのノミという道具の凄さに心を奪われていたことだと思う．長じて木よりもっとハードな素材である石に進んでいったのも，まず道具作りから始まるその作業に魅かれたことに大いに関係あるだろう．

大学に入って以来石彫を続け，その素材の特性から作品を室内に置くというよりも屋外に置くということを積極的に考えるようになり，以後の制作の原点となる大学の卒業制作「三つの石のある風景」が出来上がった．地面に三つの石を置きその石の一部が風によって抉られたように窪み，またその表面を風が撫でるように丸まった形が表現されている．大きな石に取り組むのは初めての経験であり，結局三年生の頃から一年半がかりで仕上げた．現在は道工具も著しく発達し，同様の作業をもっと短期間に制作できるようになった．だが当時，殆ど手作業というその制作の経験のなかで学んだことは，現在の作品制作につながっている．例えばノミを１本作るにも火造りといって，フイゴ場で加熱した鋼材をハンマーで形を作りそれを焼き入れするという作業があるわけで，そのノミを20～30本も毎日作っておく必要があり，そうしてようやく石を彫ることができるわけである．焼き入れが悪けれはノミが使えず，また火造りから始めなければならないということが何度も続き，その様な体験から徐々に技術を習得していったことが，便利になってきた現在に

も大いに役立っている．

以来二十年余り，現在まで私の制作した作品についてその制作過程や設置されている状況について述べたいと思う．またそれが周囲の環境とどのように係わりを持っているかについて考察してみたい．

作例 (1)

「風景 ― 75」 100（H）×400（W）×300（D）(cm) 黒御影石 1975

第3回彫刻の森美術館大賞展出品（昭和52年6月）彫刻の森美術館

この作品は大学院修了制作として作った作品で，五つの石を使い構成要素としては部分と全体との組み合せによる．具体的には二つの大きな石のグループと三つの小さな石のグループに分かれ，それらが組み合わされて一つの作品として成立している．大きな石の組は断面が三角形であった原石を半分に割り，その割面である三角形をこの作品の全体を通じての形の単位として，他の構成する石のそれぞれの割れ肌面も三角形であり，それにつながる曲面の形を変えることで石一つ一つの変化をもたらしている．当時自分の作品を作る上での動機として，一つの単位形を基本としてその展開を図るということがあり，特に三角形という形の強靱な横造に魅力を感じていた．三角形は他の様々な幾何形態の基本となるもので，その形の組み合わせにより色々な形に展開させていくことができ，作品の中になんとか使うことができないものかと考えて，組み合わせる石の一断面として導入してみた．

制作過程を思い出してみると，最初に石を二分割することに大変な手間がかかったことを記憶している．石の割れ肌というものは岩盤から切り出された石の塊が割られ，その瞬間初めて我々にその姿を晒すわけで，その石が計り知れない程の長い年月をかけて生成され，割ることによって一瞬にして日の目を見ることになる．それを今自分の手で行うということに大変な感動を覚えるのである．学生のとき石彫の授業で最初に矢（ヤ・鉄製のクサビ）で石を割ったときの感激を今でも忘れられない．矢を打ち込むためにノミで穴をあけ，そこにすべりどめのワラを噛ませた矢を打ち込み順番に大ハンマーで叩いていく．やがて石にヒビが入ってくるとその叩く音が変わり，摩擦でワラの焦げる匂いとともにボコッと音がして石が割れる．その瞬間は今でも胸時めくものがある．近年私も大学生に石彫の実習を指導しているが，この時の感動を彼等にも共有してもらいたくて，工具は電動ハンマー等を使って矢穴をあけたりもするが，一番最初に割ることの快感を体験してもらっている．

割れ肌につながる曲面は割れ肌から見えぬ反対側になっているのだが，そこには割れ肌の荒々しさとは対照的に緩やかな丸みを帯びた曲面でそれぞれの部分を構成している．そして，配置はその周囲を視点を変えながら歩いてみると，割れた石の面と磨かれた面とが見え隠れして視覚を楽しませてくれるはずだ．石の配置には，やはり当時興味を持っていた庭園，なかでも枯山水のイメージがそこに大きく影響を及ぼしている．枯山水の場会は自然石をその石の形に会わせてそれぞれ組み上げていくのだが，私の作品ではそれを彫刻として彫った形態のものを組み合わせていった点が異なってくる．枯出水の場合そこには人為を表に出さずメタファーとしての宇宙が表現されていると思うのだが，私が作品として組み上げたものは手法としての枯山水の配置を取り入れたことで，積極的に自然景観の取り込みを図っている．彫刻作品は触れられるものでありそのために石の傍らまで行って間近かに見ることも必要であり，またその事が可能でもある．そのためには結界を定めて人の進入を禁じたものとでは大きく異なってくるであろう．彫刻作品，特に私が現在に至るまで続けている石彫については，視覚だけの鑑賞ではなく触覚によっても鑑賞の手段を求めていきたい．

修了制作展に発表後，推薦により「第3回彫刻の森大賞展」に出品，その後「美ケ原高原美術館」へ設置となった．現在は岩手県岩手町の「石神の丘野外美術館」に貸し出され展示されている．美術館活動におい

て作品が美術館相互によって貸借されるという方法は，多くの人々に作品を見てもらえるという点で良い方法の一つではないかと思う．今回の場合，五年間周期で作品の展示替えをするということを聞いており，定期的にこの様な企画が催される点で，普段作品を見る機会の少ない人々にとっては多くの作品を一度に見ることができるという利点があり，作家にとってもまた違った環境で見る自分の作品に新たな刺激を受ける．一昨年展示の立ち会いのために「石神の丘美術館」に行き，改めて展示した自分の作品を見るとき，これは自分で作った作品であるのかというような不思議な感慨にとらわれた．二十年近く前自分で確かに作ったはずで，移動のときに付けたキズも覚えているのだが，一旦自分の手を離れ長い年月を経ると，これは自分の作品というより，その置かれた場所のものになってしまうのではないだろうかという思いにとらわれた．こうしてまた新しい環境に置かれて何年か経つとこの場所がこの作品にとっての最良の場所になるのだろう．作品が置かれ，その周囲に張られた芝が根付いて作品と調和してくるとより一層その感がするだろう．それは作品がその環境と順化することであり，それを取り囲む景観が作品とその周囲を包むことになる．これこそ正に私が彫刻を制作する上での長年のテーマである．

作例 (2)

「風景」 100（H）×270（W）×280（D）(cm) 黒御影石 1980

第７回神戸須磨離宮公園現代彫刻展出品（昭和55年10月）神戸須磨離宮公園

この作品は公募コンクール展に初めて入選して，模型作品から実物大作品に拡大したものである．模型作品（50cm立方）から拡大制作するためには単に寸法を大きくするのではなく，全体のバランスや構成なども考えながら拡大していかなければならず，また体積も模型の３乗倍となるためかなりの重量となってくる．模型では簡単に組み合わせや配置なども変えることができるのだが実作となると相当の手間と労力が必要となる．そのため予め構成計画を綿密に立てておかなければならない．従って比較的簡単にできて変更修正なども容易な素材でマケットを作っている．応募模型作品は実制作と同じ素材（石）を使って作っているがこのマケットではスタイロフォームいう発泡スチロールを使用して，カッターやヤスリ等を使い実作の１／10の模型を作る．この段階ではかなりの精度で形をきめ図面を起すようにしている．こうして下準備を行いながらその間に石の注文を行う．工場で切断加工などをした石が搬入されてくると，その大きさと存在感にまず圧倒されてしまう．いつもながら大きな作品と取り組むとき最初に原石を前にして果たしてこの石を彫って作品を仕上げることが出来るだろうかという不安が常に湧き起こってくる．しかし一旦手掛けてみると後はひたすら作業をするしかないという気持ちで制作を始めている．

野外に置くことを前提に作品作りを行っているため，野外に置いた時の効果や周囲の影響も考え合わせながら制作に取り掛かっているが，模型段階と実物大に出来上がった時や，また設置後の様子なども色々と変わって来ることが多い．ある程度予測が付くものと全く予測が付かず置いてから気付くこともある．特に作品の周辺の植栽に関しては樹木の生長がどの様になるか，予測はしているがこちらが思っている以上に生長が早く，作品を覆ってしまうということもある．作品を設置して数年経ってから再びその場所に訪れると，こんなに周囲が変わってしまったのかと驚くことが往々にしてある．

この作品を制作する過程において，原石が搬入されると図面と模型により石の切断面を一面選び，基準面と設定し，それをもとに他の面も10センチ間隔の方眼を入れ，そこに図面からそれぞれの面にスミ入れをしていく．次にドリルで穴をあけセリ矢を使って大まかに割っていく事になる．後はカッターやノミを使い必要な大きさまで彫り落としていく．大きな作品を作る上で一番の苦労は作品の移動である．手元にあるのは手動の道具しかなく，原石重量５～６トンのものを動かすために三脚を立てそこにチェーンブロックを吊り下げ石にワイヤーロープを掛けて転がしたり移動したりする．たまたまこの作品を制作しているとき，並行

して仲間たちと「風の又三郎群像」を制作しており，彼等に手伝いを頼んだりもした．

芸大在学時より石彫教室では共同作業が多く，石の片付けや移動に関しては自分のもののみならず他の人の作品の場合にも皆が協力して助け合うということが日常的に行われ慣行となっており，こういう場合仲間の協力が非常に有難く思うときである．

出来上がった作品を展覧会場である神戸須磨離宮公園に搬入設置ということになる．こういう野外展の場合，展示ディレクターがおりその指示のもとそれぞれの展示場所が決定されるのであるが，私の作品は庭園内の芝生の上に置くことが決まった．私も地中から生えているという設定にしたかったので，こちらの希望が適った次第である．設置に際して芝生上というのは下に基礎がないわけでこの様な重量物を置くとその重さで作品が沈下してしまうということが起きる．約一ヶ月間の会期中での展示であるため特別な基礎を用いなかったが，地盤が軟らかいため組み合わせにはかなり手間取った．この作品の場合二つの大きな石の部分に小さい石が入り込む構成なので大きな石が沈んでしまうと小さいものが入らないということになる．そのため出来るだけ沈まないようにするため，一旦位置を決めたら動かさず可能なかぎり一度で収まるように注意した．設置作業は専門業者が行い当方はその指示を出すという形で行われた．移動設置に関しては実際の作業を任せるということが多いので双方の意思の疎通を図っておくことが大切である．

展覧会終了後作品は神戸市のポートアイランド内に設置されることが決まった．除幕式当日，式が終わると直ぐに子供が数名石の上に上り始め，作品がたちまち彼等の遊び道具となってしまった．当時，自分の作品がこの様な扱われ方をするとはさほど思ってなくて，子供達にとっては彫刻の作品も自分達の遊び道具として楽しめれば特別の意味を持たなくてもいいのだと思うようになった．この時以降自分の作品が遊具の一つとして，作品の上に乗ったり滑り降りたりして楽しめるものであるなら，それも造形作品の一つの鑑賞方法であるのだからという思いを一層強くしていった．

現在，阪神大震災のため神戸市内は周知の通り壊滅的な被害に遭遇している．ポートアイランドもその域に及んでいると聞き，恐らく作品も土砂に埋没しているのではないかと思われる．今は神戸市内が復旧して一日も早くまた彫刻と戯れる日々の来ることを望むものである．神戸市はこの様な彫刻展を企画して市内に多数の作品を設置してまちづくりの一環としている．それも長い年月をかけて収集・設置したものが一度の地震により倒壊したということで自治体としても大打撃であろうし，市民にとっても親しんだ作品が失われるということは残念なことであるに違いない．現在はまだ作品の復旧よりもそれぞれの暮らしの復旧に重点がおかれていることと思うが，まちが復興し人々の心に余裕ができてくれば必ずや再び神戸のまちに彫刻の作品が置かれることになるだろう．

作例　（3・4）

「風景Ⅱ」　110（H）×230（W）×240（D）（cm）　黒御影石　1984　作例(3)
第9回神戸須磨離宮公園現代彫刻展出品　（昭和59年10月）　神戸須磨離宮公園

「風景Ⅰ」　120（H）×250（W）×180（D）（cm）　黒御影石　1983　作例(4)
メモリアルアート現代野外石彫展'89出品　（昭和62年9月）
入間メモリアルパーク

「風景Ⅱ」は前作と同様神戸で行われた彫刻展に入選し拡大制作したもので，丁度馬の背のような形をした三つの部分で構成しており，それぞれの凹凸に互いに入り込む形になっている．制作途中の段階で何度か仮セットをして見るが仕上がった作品をセットする際は非常に神経を使うもので，あまりズラしたりすると磨き面どうしが擦れ合って傷付くという事態を引き起こす．よってセットする石の順番や位置などを充分に

検討して，事前に模型などでリハーサルをしておく必要がある．またこの作品も底面の幅が狭く，余り位置を動かすと沈下してしまうことになり，それぞれの接点が異なってしまう．作品のイメージが地中から湧き出すような力を表現したかったので，ある程度は地面の中に埋まることは必要だが，その辺りの兼ね合いが難しい．

作品を設置してみると，誰かが言っていたけれど，動物の親子が体を寄せ合っているようだと．自分が制作する時にはその様な考えはまったく無かったのだけれど，制作した後この様な感想が聞けることは思いも寄らぬことだけに嬉しくも思い，人は色々な見方をするものだと考えさせられた．自分の制作した作品が公の場所に展示され，初めに自分が意図したことと違う見方をされることは，ある意味で作品が自分の手を離れて見る人のほうへ近付いていったという思いがしている．一般的な作品の見方として，この様な抽象形態の作品は分かりずらいとか，何を作っているのだろうという見方をされることが多いのだけれど，この様に見る側の想像力を喚起できれば喜ばしいことである．

展覧会終了後，暫くの間知人の子供絵画教室の前に置かれていたが，これも直ぐに馬乗りする子供達で一杯になってしまった．数年の間その場所に展示しておいたが，その後恒久的な設置場所が決まり移設することになった．その時絵画教室の職員や子供達がこの彫刻と「お別れの会」を開いてくれた．自分でも思いも寄らぬことであり，これほど作品が皆から親しまれていたのかと思うと，改めて造形作品が人々と共にあるのだということを再認識した次第だ．

尚，この作品は展覧会にて「京都国立近代美術館賞」を受賞，現在は東京都江東区の石浜橋橋台敷公園に設置されている．江東区は運河が多く流れておりそこに沢山の橋が架けられ，旧くなった橋を順次新しく架け替えている．その際，橋のたもとに小公園を作り立体造形物を置くことに積極的であり，私の作品もその経緯で設置されることになった．周辺は倉庫や工場が多く昼間はトラック等車の通行も多いところで，広々とした空間は望むべくもないが，近隣の住民のための一時の憩いの場となれば幸いである．公園にはベンチ等も設置してあり散歩の途中の休憩や子供達の小さな遊び場としての役割を都会の公園では担っている．

また，江東区にはもう一点「風景Ⅰ」を設置している．こちらのほうが早く設置したのだが，やはり橋の傍らの散策路の小空間にあり，位置的にはまちなかのかなり人通りの多い場所で，橋を渡りながら見下ろす形で作品を見ることもでき，川沿いの散策路をたどっていけば幾つかの造形物もみることができる．このまちの地理的な要素である川・運河を生かしながらそれらと密接に結び付きながら，彫刻のみならず立体造形物を置くというまちづくり・公園づくりはそのまちならではの特性に大きく係わってくる事である．

作例 (5)

「風景」 105（H）×210（W）×220（D）(cm) 白御影石 1989

第４回国民文化祭さいたま89彫刻プロムナード出品（平成１年10月）さきたま緑道

この作品は国民文化祭と言う催しの中の一つのイベントとして行われ，やはり模型作品で応募，入選作について拡大制作するというもので，出来上がった作品については埼玉県内の二市一町にまたがる全長4.8キロメートルの遊歩道「さきたま緑道」に50点の作品を設置・展示したものである．遊歩道としてはかなりの距離を作品を見ながらたどるわけで全体を見通していくにはかなりの健脚を要する．周囲は用水路沿いの田園地帯で春から夏にかけては青々とした田や川が続き，周辺を遮るものがないから，一つの彫刻を見て次の彫刻が先の方に望まれるのをたどって行けるようになっている．50点もの作品が並び，色々な傾向の作品が置かれているため少々雑多な感じがするのは否めない．このように点数が多いと言うことは多くの作家に機会を与えるという点では良いのだが，その分，統一性の無い展示と言うことになりかねない．周囲が田園地帯であるということを考慮にいれて，主催者がその辺りの事情をよく把握して作品を選び設置しているかが

大きな問題となる点であろう．一点ずつ見ていけばどれも力感のある作品揃いであるが，全体として眺めた場会，果たしてこれで良いだろうかと思うこともある．もう少し作品点数を絞っても良いのではとも思う．

私の今回の作品は今迄の作品とは表面の仕上げを変えてみた．今迄は表面を鏡面に磨いて周囲の風景を作品の中に取り込んでいたのだが，この作品では表面のノミ跡を残したまま磨き，より触感に訴えるようにしてみた．それも彫刻が並ぶ遊歩道ということで，直に作品を触ってもらいたいという意向からだ．

この様なイベントによって作品を収集するということで数多くの作品を一度に集められるという利点が主催者にはあると思うが，広く浅くではなく小数の作品に対して制作の補助を厚くするという方法もあると思う．数ばかりではなく質のより一層の向上を目指しても良いのではなかろうか．（最近の国民文化祭では実物大制作の点数を減らしているようだ．）

コンクール型式の模型作品での応募については制作・主催の側にそれぞれメリットがあるのだが，もはや作品の量を競うのではなく作品を置くまちごとに必要な作品を設置していくべきで，ある場所にとっては良い作品であっても置く場所によっては全くなじまず，かえって周辺の景観を損なうものとなる恐れもあるわけで，主催者や展示に携わる人々にとって一層の考慮が必要となってくると思う．

作例　（6・7）

「風景」　195（H）×250（W）×220（D）（cm）　黒御影石　1989　作例(6)
第2回現代彫刻美術館野外彫刻ビエンナーレシンポジウム参加制作（平成1年8月）
長野県上田市　市民の森公園

「風景」　210（H）×180（W）×150（D）（cm）　黒御影石　1992　作例(7)
92米子彫刻シンポジウム参加制作　（平成4年8月）
鳥取県米子市　米子市文化ホール横

これら二つの作品は彫刻シンポジウムに参加して制作したもので，彫刻シンポジウムとは主催者が制作費・材料・宿泊費など経費を負担し，参加作家数名により現地合宿生活を送りながら一定期間作品制作を行い，出来上がった作品を現地または主催者に委ねることで，作家同志の交流と現地の市民との交流を深める目的をもって，公開制作を旨としている．近年この方式が各地で企画され夏休み期間中はちょっとしたシンポジウム・ブームとなっている．この方式ではある程度実績のある作家の作品を収集するという目的に適うもので，自治体や民間の団体が主催する場合が多い．現代彫刻美術館というのは私立の美術館であり，米子シンポジウムの方は米子市の民間ボランティアグループが主体で募金により資金を集め運営するという形態である．どちらも公開制作ということで地元の人達が見学に訪れ，彫刻に関する質問や制作過程での感想を話してくれたりする．また作家のほうは市民特に子供達のための彫刻教室を開催して，交替でその講師を勤め彫刻への理解を深めるようにしている．米子では1988年の第1回から隔年でシンポジウムが開かれており，その度ごと彫刻教室に参加している子供達もいて，彼等との交流は意義深いものといえよう．

米子シンポジウムの場合現在まで（1994年まで）4回開かれており，私が参加したのは第3回目になるのだが，それぞれの作品が市内に設置されている．2回目以降の作品は米子市文化ホールとショッピングビルの間の通りに道路を挟んで両側の歩道に設置して在り，彫刻ロードの様な趣を呈している．当初設置に関しては市の開発とも関連することで，自治体の意向に沿う形で置かれていたようであるが，私達の参加した3回目から作家側の設置に関する主張や意見も事前に充分検討してもらい，お座なりな設置ではなく設置場所の周囲も可能なかぎり作家側の意見によって変えられるようになって，一律同じ台座の上に設置するというようなことは無くなってきた．これも作品が画一的に設置されるのではなく作家個々が抱いている環境との調和を考えてのことであり，良い結果となったのではなかろうか．

この様に公共空間に作品を設置する場合，単に作品が出来たからここに置けばということだけではなく，新たに作品を制作するという点で，出来得る限り主催者・設置者・作家・市民との意見交換が重要なことと思われる．特にこの様な彫刻ロードというようなものに発展していくためには是非とも必要である．

米子シンポジウムの場合4回展を一応の区切りとして，以降は自治体が主導で今後も続けて行く模様である．これも民間ボランティアの熱意が市民に通じそれが市を動かしたということに有るようだ．この事に今までの参加作家たちの作品が多少ともその役割を果たしているのではと信じている．

上田シンポジウムの場合は主催が私立の美術館ということもあり作品はその美術館の所有となっている．そしてシンポジウム終了後作品は上田市内・東京都目黒区内・群馬県草津町内などで展示を行い，現在は長野県東部町内の公園に他のシンポジウム作品と共に展示されている。

まとめ

以上のように自作の制作に至る経緯やその過程またそれを取り巻く様々な状況を述べてきたが，その制作形態は一様に括ってしまうことの出来ない複雑な問題が存在している．作家である私達は自分の制作意欲をどの様に結び付けていけば良いのか．模型作品と実作品とはスケールが違うわけであるし，作家は出来るだけ実制作できるように希望する．しかし現実には金銭的に作家個人が負担するには余りに多額の費用を必要とするわけで，簡単には制作には移れない．また主催者はその「まち」なり美術館に展示する作品が欲しいが，通常の方法で購入すればそれに莫大な経費がかかることになり，制作費の補助という形のコンクール展やシンポジウム形式での作品収集に努めるということが行われている．それに市民や自治体のまちづくりという構想が連動して一つのプロジェクトが企画されるということになる．それぞれの利害が一致してくるので一見良いことではあるのだが，これも無定見に作品を収集設置していけば，まとまりが無く周囲の景観とあい入れない風景となってしまう．最近よく言われている彫刻公害となってしまうのではなかろうか．

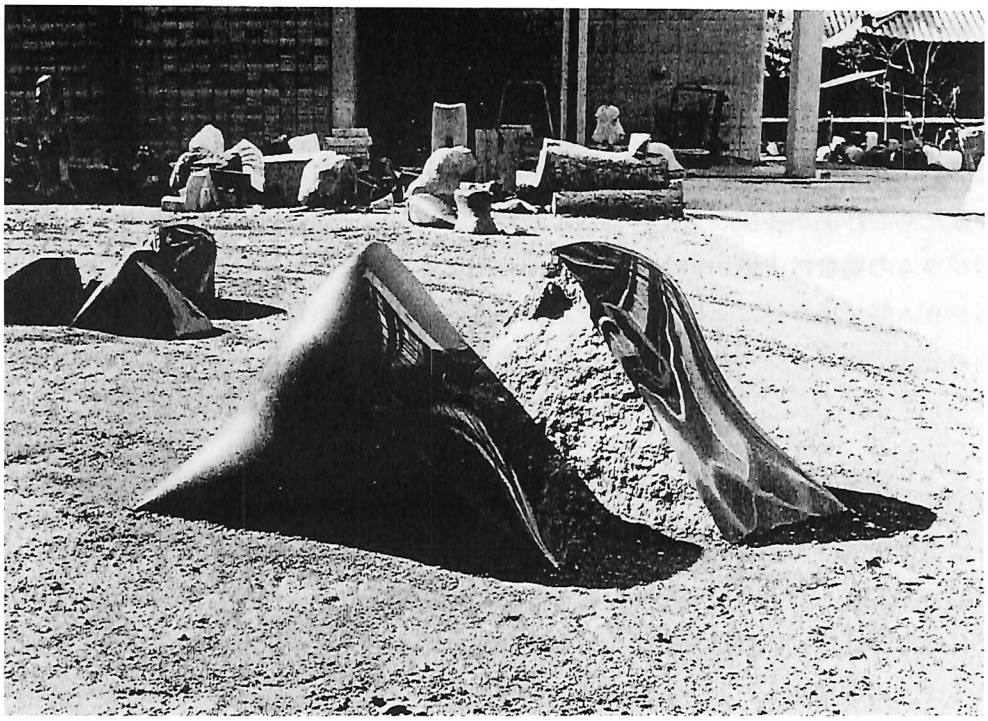
作家の立場として，自分の制作意図が見る人達に理解して貰えれば良いが，周囲の事情ばかりに流されてしまうと単なる「作り屋」に終わってしまう危険性もある．作家は皆自分の作った作品に思い入れがあり，大事に思うものであるが，このように屋外空間，特に公共空間に恒久的な設置ということになれば十分その辺りを理解していかなければならないと自戒の念を込めて思うものである．そして市民の側は自分達に託された作品をこの先どの様に維持管理して行くのかという責任があるはずだ．

作品が設置される時，華やかなセレモニーが行われその後のメンテナンスがまったく不備であるという状況がかなり在るようだ．現に作品の一部が破壊されたり，落書き，ネームプレートの破損や，周囲の植栽の手入れ，それに経年変化による作品の汚染等，数え上げればきりのないほど問題は出てくる．

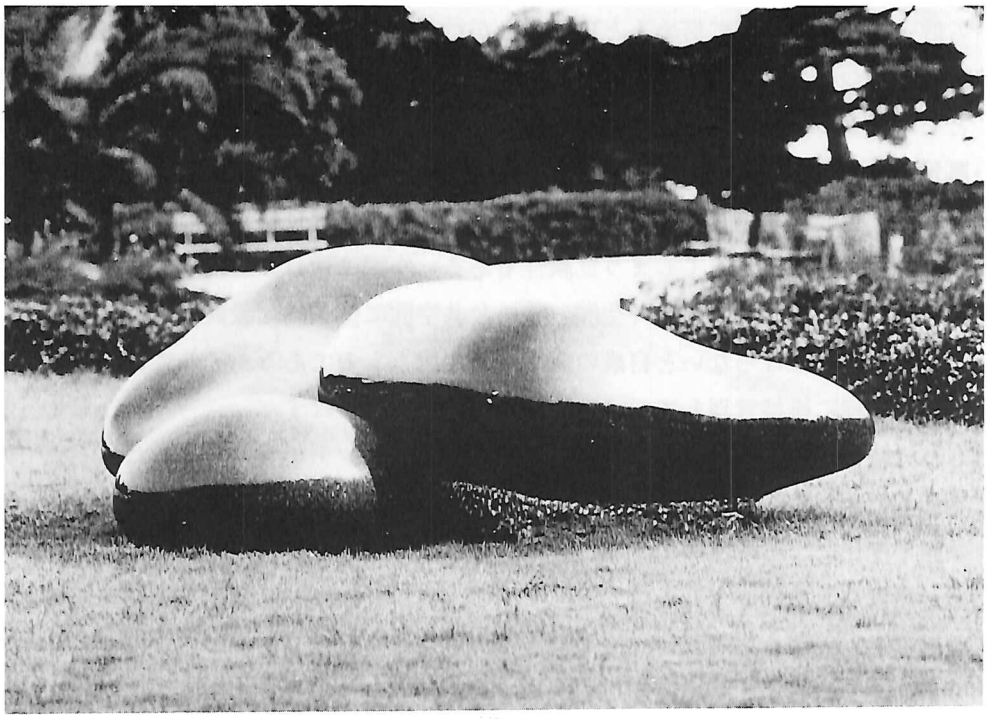
まちに造形物が設置されるということは，そのまちの人々がいかにその作品を維持管理できるかということを試されていることだと思う．それが出来ぬ程度の民度では作品は当然ながらそのまちとは調和していないということであろう．作品をまちに置くことは，それを作った人，それを置いた人，そしてそれを見守る人々との協調によってなしとげられると思う．また，皆が緊密に結び付くことによって新たな風景がそのまちに現れることになるだろう．

以上，私は自作を中心に環境と造形物との係わりについて所見を述べてきたが将来もよりよいまちが出来るように努めて制作に携わっていきたい．

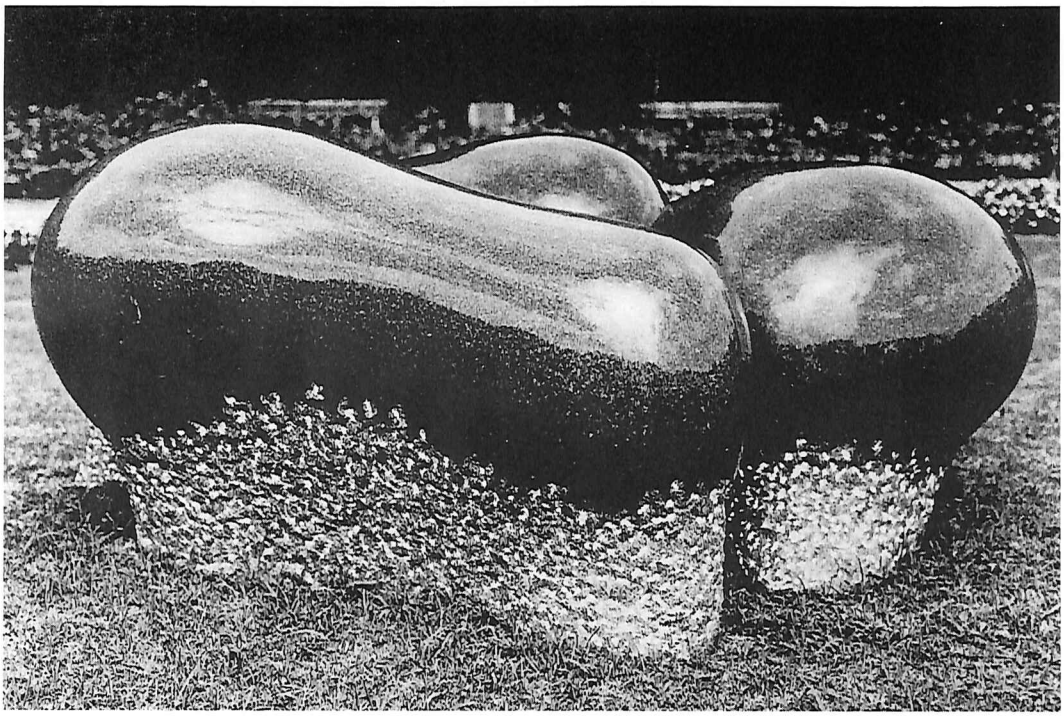
作例(1)　「風景'75」



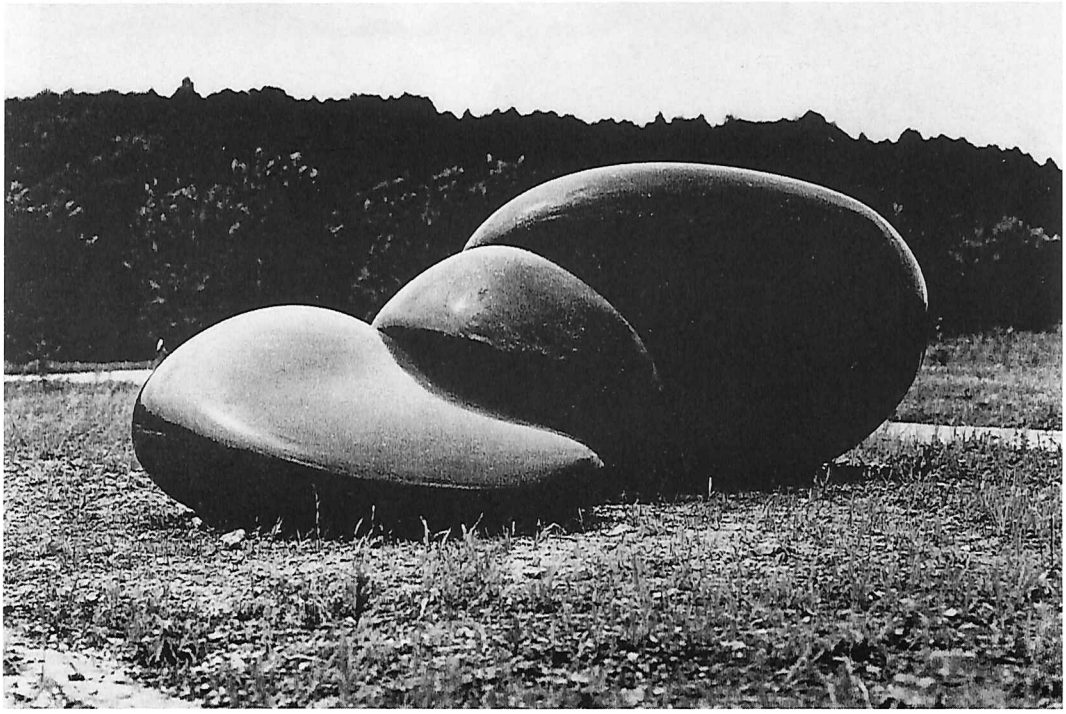
作例(2)　「風景」



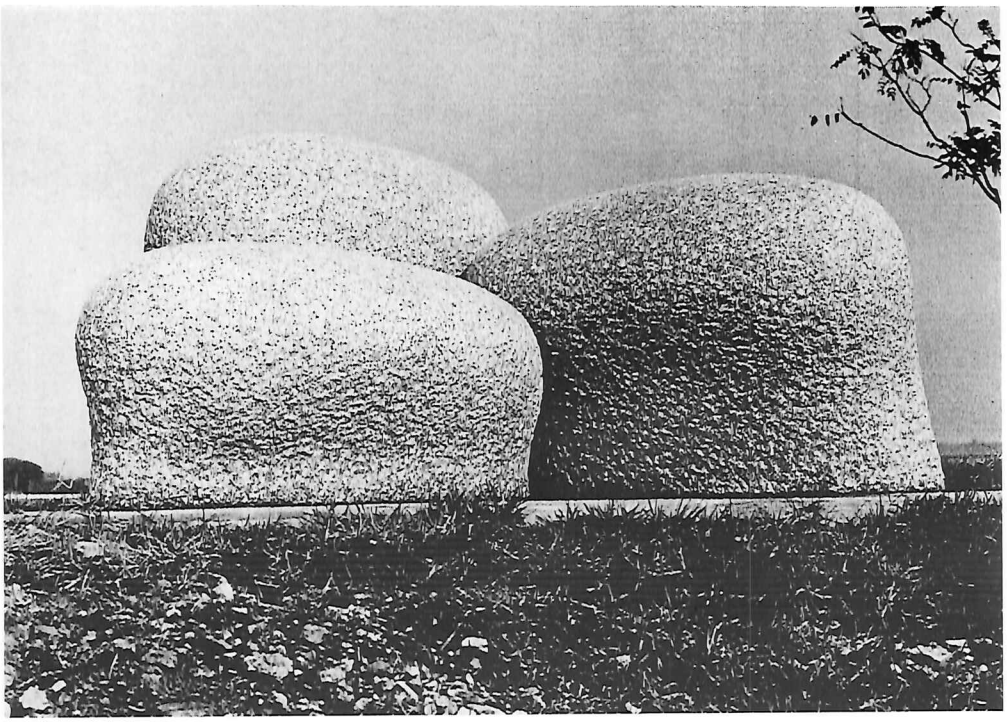
作例(3)　「風景Ⅱ」



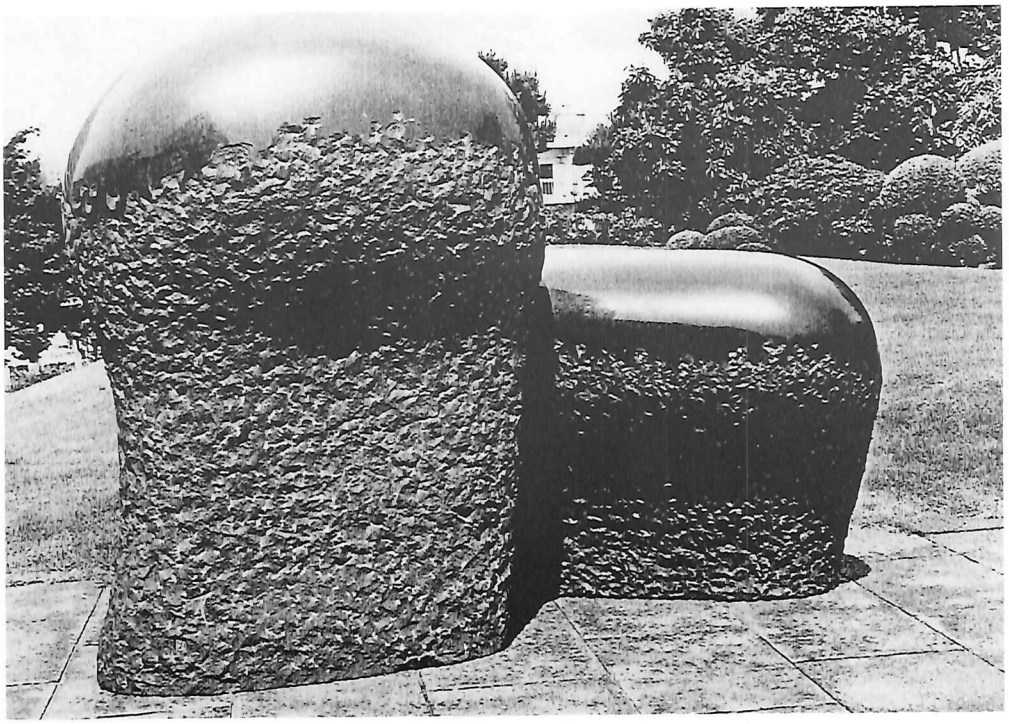
作例(4)　「風景Ⅰ」



作例(5)　「風景」



作例(6)　「風景」



作例(7)　「風景」